

大学放浪記 (41)

伊藤信孝

マエジョ大学客員教授・再生可能エネルギー学部

本報では大学在職時に立ち上げた「3大学国際ジョイント・セミナー・シンポジウム」について記す。時間の経つのは速いもので、諺に言う「光陰矢の如し、Time flies like an arrow」をまさに実感する今日である。1994年に立ち上げたプログラムであるので、正確には29年前になる。毎年ホスト大学が順番にホスト役を引き受け実施してきたが、2021年は流石に厳しい状況になったコロナ禍の影響で、キャンセルとせずにはおられない状況でキャンセルとなった。今年(2022年)はコロナ禍の規制も若干緩くなり、海外渡航、現地訪問も何とか可能になった。しかし現在5つあるホスト役の資格を有する大学も殆どがオンラインでの参加であり、現地訪問、対面参加をしたのはタイのチェンマイ大学と、次年度のホスト役を申請しているマエジョ大学の2大学のみであった。個々の大学の状況の事情もあり致し方ない事ではあったが、現地での開催は予定通り実施された。ホスト大学に取ってはいささか開催実施しにくい状況もあり、普段と異なる状況に種々の調整、変更を余儀なくされ、その苦労は容易に理解されたが、時の経過と共にそれぞれの大学も世代交代や、戦略や政策の変更、部局の担当者の変更などにより、従来通りの実施形態からかなり離れた理解度での事業開催の対応になることもやむを得ない。しかし従来から踏襲してきた合意事項や慣習をホスト大学と言えど大幅に変更することは許されない。新しい方式やシステム、アイデアを導入することは合意の範囲を超えない限りホスト大学の判断に委ねられているが、その範囲を大幅に外れると参加大学の参加者に違和感を与え、折角の開催実施も効果が半減する。今年の「3大学事業」については残念ながらその許容は余りにもかけ離れていたかに感じたので、「何故そうした事が生じたのか」を筆者のこれまでの経験から考え、何処に問題が有るかを明らかにしたい。ちなみに今年のホスト大学はインドネシアの大学であり、筆者は恐らく、これまでに少なくとも20回以上訪問していると記憶している。「3大学」事業以外にもかつての博士課程留学生のフォローアップなどを含めるとその記憶は当たらずとも遠からずと言うところである。

従来、今年のホスト大学ですら「3大学」事業参加のためには5月から6月頃までに事業開催に関する情報発信として大学のウェブやホームページに事業内容、予定についてアップロードして逐次アップデートして対応するのが一般的であった。こうした経緯を知るその他のホスト大学は、時期が来ても一向に情報が得られない状況に困惑して居たようである。少なくとも3つ以上の参加予定大学では幾度もメールなどで担当部署(局)から問い合わせを試みるが一向に反応が無く、ウェブやホームページも見当たらない。こうした状況に困惑して、事業の創設者と言うこともあって、どうしたものかと筆者に問い合わせが来たが、

筆者としても手の打ちようが無い。マエジョ大学でも状況は同じであり、特別に良案が有るわけではない。そのうち、たまりかねた大学の1つから筆者に連絡、要請があった。その要請内容とは、「何度も大学の事務サイドを通じてホスト大学に連絡をしているが一向に反応がない、貴方なら知人も多いと想われるので、誠に申し訳ないが尋ねて貰えないか？」と言う話であった。マエジョ大学でも参加する予定であれば、予算や日程、参加学生への応募要請、応募後の人選など必要な事項が沢山あるなかで一向に情報が無いのが問題であった。ホスト大学の学長室を含めかつての留学生や知人を通じて、「3大学事業開催」について早急に情報提供して欲しい旨メールを送信した。特にかつての留学生にはより詳細な状況説明をして、情報入手への協力を要請した。すぐに反応があり「直ぐに連絡する」という関係者トップの意向がその返事であった。しかし、その後も一向にその通りの対応は無く、ただひたすら時間が過ぎるのを「待つ」と言う空しい状況が続いた。マエジョ大学の副学長も流石に「どうなっているんだ」と筆者に詰め寄る場面も何度かあったが、かつての留学生の言葉を信じるしかなく、困惑した状況がその後もしばらく続いた。「もうこれ以上は何時までもじっとしては待てない」との気持ちが高まり、忍耐も限界に達し、再度メールを送信した。流石にこの連絡の後しばらくして返答が来た。そのメールには事業開催実施についてのポスターが添付され、開催日時、期間、テーマ、コンタクトパーソン（公式の連絡者）の名前などが記載されていた。やっとの思いで、心を緩める事が出来る状況になったものの、他のホスト大学の状況を調べると、そのポスター付き連絡は既に筆者が質問依頼を受けた他のホスト大学には既に2週間も前に送付されていた。すなわち筆者の問いあわせの後、極めて早い段階でそれらの大学には返信があったようである。従ってそれらの大学では、学生の応募や発表論文提出期限などの指示を既に与えていた。なぜマエジョ大学だけがそうした異なる対応をされるのか分からなかったが、事実はこのようであった。仲を取り持った筆者としては、こうした対応の遅れが筆者にあると想われるのを避けるために学長または副学長宛に連絡をして欲しい旨ホスト大学に要請もした次第である。その後、学生への応募申請のアナウンス、引率教員人選、そしてやっとならマエジョ大学としての参加者からなる派遣グループがかたまりかけたのは10月初めであった。それにはもう一つの問題が有った。ポスターが届いた段階で安心し、論文作成の指導や同行引率教員の人選に力を注ぐ余り、気にしていなかったが、いざ論文作成が終わり、アブストラクトとフル・ペーパーのアップロードをするべく、指定のURLにアクセスするとファイルが開けない。筆者のみがファイルを開けないのではと考え、他の学生や教職員にも協力を求めたが、問題はファイルを開く為にはホスト大学の許可が要ると言う所にあった。この問題解消の為に、公式に指定された人物に幾度も連絡を取るが一向にラチがあかない。その人物の対応が、あたかも「貴方々のスキル（技能）が低いからファイルが開けないのだ」と言わんばかりの振る舞いである。まともに対応するどころか、「レベルの低い大学には対応したくない」と言いたいかの如き無礼な振る舞いに腹を据えかねて、再度猛抗議してやっとなら返事がきたのが9月の16日で、アブストラクトの提出締め切りは9月5日であったから、締め切り日は既に終わっており、論文提出の締

め切りは9月30日というきわどい状況であった。事情を説明し、1週間ほど締め切りを遅らせてもらう様に、お願いしたがどうしても1、2日ほど遅れた。しかしその後全く連絡が途絶え、締め切り期限までに提出の論文2編は受理されたが、それ以外については全く返事が無かった。事業に参加するためにはホスト大学からの正式な招聘状が必要であるが、一向にその様な話はなく、毎日が不安の連続であった。10月の末になって、チェンマイ大学から「ホスト大学から正式な招聘状を送付するので参加者名簿を作成の上、返信せよ」との連絡があり、やっと招聘状が来たかと言う雰囲気では素直に喜びも出ず。不愉快さも出るほどであった。招聘状が来ても事業参加滞在に要する宿泊費（参加登録料）はマエジョ大学の都合、未だホスト大学としての正式な立場に無かった為、費用を負担する必要があった。しかしこれについても一向にそれらしき記載は無い。万全を期して余分に金銭も用意して臨まなければならないが、結果としてはホスト大学の好意で支払いは不要になった。

事業開始初日は開会式で、ホスト大学の学長以下要職にある教職員が一堂に会した。しかし学長は開会式でのメッセージの対応などで顔を見ることはできても話すことはできず。学長の歓迎メッセージが終わると筆者はその後でキーノート・スピーチ（基調講演）を為なければならず、その準備のためにPPT資料やプロジェクターへの結線、音声確認などで学長に会って話す機会も無かった。またあいにく持参したはずの名刺がポケットに無く、結果として相互に紹介する機会が無く時間が過ぎた。夜のプログラムとして歓迎レセプションなどが催されるのが普通であるが、今回はそれも無く、学長に会えるであろうと期待していた筆者に取っては拍子抜けで残念であった。翌日から学長はバンコックに出かけるという事で、滞在中に学長に会う機会を逸した。副学長も海外出張で会うことができず、かろうじて学部長、ディレクターには会うことができた。翌日公式な窓口としての人物に偶然会うことになった。名刺交換もなく、相手が誰かも分からぬままに話をしたが、相手が誰か分からないから、ホスト大学訪問に至るまでに生じた種々の問題を遠慮無く披露した。そのうちLINEで話ができるように設定して話は終わった。3日目になって、キーパーソン（代表者）会議が開かれた。この会議でマエジョ大学の次年度事業のホスト役が正式に決まる。事前に詳細な情報、連絡が無かったので、会議に参加するには何処に行けば良いのかうろたえて居たが、会議開始の時間が迫る仲、やむかたなくホテルの部屋からオンラインで参加する事になった。あとで気がついたことであるが、ラインの中にメッセージが残っていて、「どこに居るのか、連絡したのに返事をしないのは友人ではない」と言う表現があった。ワイファイの受信状況が安定しない外地で、連絡したときに応じないのは友人ではないという表現には驚いた。電話してもつながらない場合や、気がつかない場合もある。連絡したときに直ぐ連絡に応じないからと言って友人ではないと言われたのには驚いた。送信主は公式担当者であった。自分の都合の良いときに連絡がつながらないと言って相手の都合や事情も考えずに、友人ではないと言われるのではたまったものではない。こうした人間性に驚きを隠せず、何という人間だと失望が脳裏を埋めた。自分の思うように事が運ばないと、相手が悪いという判断では国際交流のみならず人間関係は良くならないし、その関係維持すら難し

い。その後の滞在中、その人と話をする機会は無かったが、応接のまずさに周囲の関係者も気づき始めていたようである。ここで言う重要な問題点は、こうした人物が大学には少なくないということであり、長年続く国際交流事業では、事業の過去の経緯や精神について全く知ろうとせず、たまたま国際交流分野に配属されたからと言って、自分があたかも大多数が認める国際交流の専門家であると勘違いして、誰にも聞く必要は無い、全て自分は分かっていると言う認識で対応するから、これまでに知り合った人間同士が不愉快な想いを強いられ、その後長年掛かって築き上げた関係がそれきりで終わるという事になる。筆者が常に言うように、信頼は一度なくすと2度と戻らないと考えるのが常識である。戻っても同じレベルには戻らない。全ては始めからやり直しである。問題のあるその人のみがそうした事態に陥るのは良いが、関係の無い者までその余波を受けて、その後の関係や協力にブレーキがかかる。大学にとっても、関係の無いその他の人にも大きな損失になる。そうした人物を窓口に座らせる判断の低さ、人選における判断の悪さに物が言えない。滞在後半になって筆者の知る知人もパーティに参加する様になったが、おそらく上司から注意され、対応の悪さを補う意味での処置であると聞いた。4日間のメイン・イベントを終え、タイに戻りお礼状を書いたが、全くの無視のようである。ではこれまでの長年に亘る事業との相違は何処にあるのか？ということであるが、新しくその座に就いた人物の全ては勉強不足であると言うのが筆者の答えである。かつてこの事業に関わった人達が新しくその座に座った人達に、何時でもお手伝いするので何なりと申しつけてくれと申し出ても、自分達が全て正しいという判断で対応しているから「手助けは要らない」と固辞し、自分達だけで事を運ぼうとする姿勢がこのような憐れな、また悲惨な結果を生む。事業開催においても、時期が来たからアナウンスし、応募があったから人選し、その後の手当も教育もせず、やりっ放しで終わる様な事業展開では予算は集まらないし、事業への支援も廢れる。普段から興味も関心もなく、時期が来たから始めると言う対応では誰も真剣になる時間すらない。事業企画者すら知らない事業に投資する人は居ない。中身の分からない事業に投資する投資家はいない。早晚事業の衰退が激しく、果てには事業の廢止につながる。上に示した対応がいずれ事業の崩壊につながる事は容易に推察できる。世代交代で国際交流担当の人材が代わると、上記の様な事態に至る大半は、研究に於けるリタラチャー・レビュー（文献検索）と同じで、事業に対する勉強（リタラチャーレビュー）不足から生じる。国際交流では予算が使えるからと言う理由だけで、各学部から選出された委員の全てが国愛交流に通じている訳でもないのに、そのポストのみを狙う政略的な学部が予算目当てにつまらぬ挙動を見せるために、一向に国際交流事業は伸展しない。表面的には、或いは外部からは華やかに活動しているかに見えてもあくまでも「見せかけ」である事業が多い。オリジナルな事業は極めて少ない。いわゆる今流行の言葉で言うならば、長期に亘り事業が継続実施されている「持続可能な事業」は稀である。事業のオリジナリティ、時代を先取りした精神、理念に満ちた事業は探すのも難しい。他と変わったことをすれば良いと観点だけではオリジナリティとは言えないし、理にかなった哲学、理念があり、事業実施における効果の大きさ、影響を受ける受益者の範囲、社会

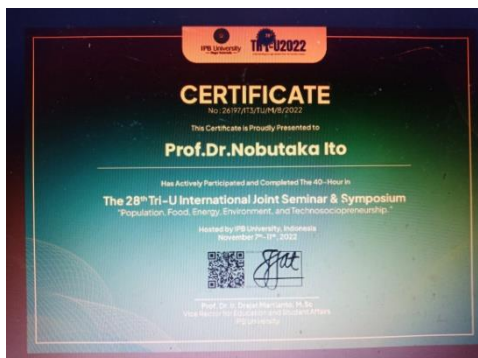
的貢献（国際貢献も同じ）など評価項目は多く、その上に事業企画者が自分の事業を高く評価することはしても他人の事業を容易に評価しない点にも問題はある。要は予算を持っている、あるいは配分する組織の判断で評価が選別されるから、まともな評価自身が疑問にもなる。と言うより、そうした評価への対応が大半であると言っても過言では無い。さて無事に4日間のイベントを終えてタイに戻ったが、これまでは習慣のように行われてきた参加証明書や集合写真の配布も無く、帰国後のメールでの添付配信となった。おそらく対応する窓口業務の担当者がそうした事を知らなかったからであろう。知ろうという気持ちも無く、全ては自分が牛耳る事が出来ると言う奢りが、恥ずかしい結果を引き出す事に気付いていないらしい。問題の影響がその担当者のみで収まれば未だしも、大学全体の評価ダウン、例えば大学のランキング評価ダウンにまで影響するようになってからでは手暮れである。要職に於いては前任者の後を受けて選ばれた後任者が常套的に行う最初の対応は前任者が行った業績を消し去り、如何にも自分がその上を行く事を見せつける付けると言うやり方である。前任者が時間を掛けて積み上げた実績を消し去るには時間も掛かるし、全てを消去することは難しい。後任者にその役職を果たす能力や自信があればこうした事は生じないが、たまたまその座に就いたばかりに、実績も無いから速く実績を残したいと言う事かも知れない。また「取り巻き陣もその後任者を尊敬しているのではなく、その人物を利用して甘いおこぼれを頂くという趣旨のみで陣営に加わっている者も少ないから、このような事が生じる。すべてはその人自信の個人的な為で有り、公的に果たすべき部分が完全に、また意図的に、あるいは要職に対するポストが誤解されて利用されている。少なくとも大学と言う最高学府にあってはそうしたことはあってはならないが、現実はその真逆である。事業に参加してタイに戻ってから約1ヶ月が過ぎた。やっとの事で帰国の挨拶をする機会が与えられ、大学の評議会に招かれ、30分余の時間が事業の総会と説明、筆者の事業創設者としての紹介とともに、今回の筆者の果たすべきミッションである重要な事項でもある「来年度の事業は和えジョ大学がホストで行う」事への決定報告がなされ、その証拠に相当するホスト大学が回りもちでバトンタッチして居る「旗」を学長に手渡す証拠写真を撮って帰国の報告は終わった。学生達にはフォーマル・スーツを着用すべく言ってあったが、帰国後余りにも期日が過ぎると、学生達もその日に大学の評議会での帰国の挨拶をする事すら忘れていた状況であった。頻繁なコミュニケーション、情報の確認は普段から習慣として身につけるべく教育する必要がある。特にこの事項は大学の品位、評価に大きな影響を与える。極端に、あるいは簡単に言えば、この行儀作法ができれば大学の評価を一気に高める事が出来るとさえ想っている。

情報機器の操作においては若い学生達の方がよく知っている。恥ずかしさを抑えて遠慮無く聞くことにしているが、教わった後、食事などに誘っても謙遜なのか固辞する学生が多い。それはそれで美しいことではあるが、食事を共にすると言うことは教員が学生に謝意を表すと言う事以外に、その学生を知りたいという好奇心、関心があるからであり、余りに固辞されると「先生を知る」という好奇心、モチベーションが学生にはないのではとさえ勘ぐ

りたくなる。先生と食事して何か（知識、あたらしいこと）を得ようと言う関心が少ないようにも思える。食事を馳走するというからには大学のカフェテリアでの安っぽいメニューでは無く、普段食しない、メニュー、例えば日本食など、いくらか高価でマナーやエチケット、異食文化にも触れることができるという環境での食事である。そうした積極性に如何に目を覚まさせる事が出来るかも、筆者の教育に於ける課題のひとつである。残念ながらタイの大学の中には講義のシェアを嫌う現地教員も少なくない。理由は自分自身の講義内容に自信が無いが、履修学生からの教員に対する評価に差が出るのを忌み嫌うという点もある。そうした教員が、そのままで行けば大学もその教員もいつの間にか「井の中の蛙」に成り大学も学生も教員も極めて積極性のない、息苦しい大学へと凋落する。そうならない様にするための対応が独立行政法人化であるが、日本の大学も行政から強制的に変更を強いられたものの、未だ完全に変更できず、後戻りの姿勢を見せている大学もある。そうした大学に限って如何にも閉鎖的で、積極性に欠け、自分本位に偏っている。従来からの単年度決算に実質戻ろうとしている姿勢は、その制度が如何にも自分に降りかかる仕事の量を減らし、楽をして給料を貰うかと言う考えに特化した不特定多数が多いかというバロメータでもある。その大学がそれで良いと言うのであればそれでも良いが、その姿勢を他の大学にまで広めるような事はして貰いたくない。何もせず少量の予算でそこそこやっていくと言う状況を甘んじて受け入れるか、多少しんどいが頑張る大型予算を手にし、大々的に活動するか、どちらを選ぶかと言う事にとどまらず、大学の使命である教育、研究、人材育成に教員として、或いは大学として如何に答えるかと言う答えが欲しい。

さてマエジョ大学が来年度の「3大学」事業のホスト大学としてその役割を担う事は既述したが、その翌年は30周年を記念して中国の大学が、またその翌年は日本の大学がホスト大学としてその任を果たすと言う段取りに現時点ではなっているが、コロナ禍など予期せぬパンデミックや戦争などの勃発が無ければの前提である。まずはマエジョ大学のホストとしての手腕を見てからと心待ちしている。いずれにしても実施母体の組織に、私心を棄てて本気でやる覚悟が無ければ事業の成功は難しい。自己満足で終わるのであれば、それは容易ではあるが・・・。

写真は2022年11月の3大学事業参加証明書（左）と大学の評議会での帰国報告での様子（右）を示す。手にしているのは3大学事業での「トークン旗 Token Flag」である。従来は参加証明書に加えて。キー・ノートスピーチ講演者には、さらにそのことを示すもう一つの証明書も発行されたが、今回はそうでは無かった。しいて言えばそれも発行すべきで有り、参加為たがその参加者の事業参加中の役割などの明記があれば何をしたのかがはっきりするからである。一般の学会でも参加証明書は大学もしくは所属機関からの旅費や宿泊費の支給支援証明に、また基調講演などの証明書は祖のイベントで参加者が果たした役割、貢献についての証明となるからである。



3 大学事業参加証明書



大学評議会での帰国報告